

僕らの時代

校長 西藤昌裕

前年度の生徒会誌『汐里』に、「私の浜高の生徒だった時代は世界史の転換点となった時期であった」と記した。本年度は、現在の浜高生が使用している『現代社会』教科書（東京書籍発行）の本文中の記述を拾い上げ、時代を振り返ってみた。すると次のような略年表が作成でき、改めて僕らの時代は日本のそして世界の変革期であったことが実感できた。

【昭和47（1972）年】

- ①ニクソン訪中、米中和解が実現（2月）
- 満開の桜のなか、浜田高校に入学（4月）
- ②米ソ両国が第1次戦略兵器制限交渉（SALT）に調印（5月）
- ③沖縄復帰（5月）
- ④国連人間環境会議が開催（6月）、環境問題を初めて世界的規模で議論
- ⑤田中角栄内閣が成立（7月）、日本列島改造ブームに湧く
- ⑥四日市ぜんそく（7月）、イタイイタイ病裁判（8月）で患者側全面勝訴
- ⑦日中共同声明、日中国交正常化（9月）
- ⑧第33回衆議院総選挙（12月）、中選挙区制度のなか島根全県区の定員は5

【昭和48（1973）年】

- ①パリ和平協定が調印（1月）、米軍がベトナム撤退を開始
- ②イギリスがヨーロッパ共同体（EC）に加盟（1月）、拡大ECへ
- ③日本円が変動為替相場制に移行（2月）、先進国が追随
- ④水俣病公害裁判で患者側勝訴（3月）、政府と企業の責任が厳しく問われる
- ⑤ワシントン条約が採択（3月）、絶滅の恐れのある動植物を保護
- ⑥東西ドイツが同時に国連加盟（9月）
- ⑦第4次中東戦争が勃発（10月）、第1次石油危機により世界経済に大打撃

【昭和49（1974）年】

- ①国連資源特別総会が開催（4月）、資源ナショナリズムの動きが高まる
- ②インドが原爆初実験（5月）、国連常任理事国以外で初
- ③世界人口会議が開催（8月）、先進国・発展途上国が協力して人口爆発に対応
- ④田中角栄内閣が金脈問題で総辞職（11月）、後にロッキード事件に発展
- ⑤フォード米大統領が来日（11月）、現職の米大統領としては初来日
- 浜田高校、制帽着用を自由化を決定（11月）
- ⑥戦後初のマイナス成長で高度経済成長が終焉、赤字国債の発行が俎上に載る

【昭和50（1975）年】

- 浜田高校を卒業、大学入学のため寝台特急出雲で上京（3月）
- ①サイゴン陥落、ベトナム戦争が終結（4月）

私の高校入試時の「社会」の問題のなかに、「公害対策基本法」（1967年公布）を解答する設問があった。高度経済成長を達成し世界第2位の経済大国となった我が国では、1960年代後半以降、経済成長に並行して様々な社会問題が発生し、僕らの時代である1970年代前半にはその解決が喫緊の課題となっていた。例えば人材供給基地と化した

地方では急激な労働人口流出が進行するなかで「過疎問題」が表面化し、一方で人口が集中した太平洋ベルト地帯の都市部では逆に過密に伴う交通問題・住宅問題等が深刻な問題となり、新聞・ニュースでもたびたび報道されていた。公害裁判の過程で公害病で苦しむ患者の生活は広く国民に知られるところとなり、僕らの政治的・社会的関心は義憤とともに弥が上にも高まっていった。国連人間環境会議の開催により、「かけがえのない地球」のスローガンとともに地球規模の環境問題にも徐々に関心が向いてきたが、当時の僕らの関心はどちらかと言えば「環境問題」より「公害」であり、地球規模で物事を見る・考えることについては未だ不慣れで、かつ不十分であった。

第1次石油危機は僕らの生活にも直接的な影響を与えた。店頭からあつという間にトイレットペーパーが姿を消したことに象徴されるように「モノ不足」が深刻となった。また戦後初のマイナス成長という不況期に「狂乱物価」（消費者物価指数前年比23.2%増）と称される急激な物価上昇がみられる「スタグフレーション」が現実のものとなった。全校集会においてトイレットペーパーの使用は1回で40センチ程度との指導があったり、部活遠征ではトイレットペーパー持参が要請されたりと、現在の生徒諸君には想像を絶する笑い話のような事態が現実发生过っていた。

資源・エネルギー問題、地球環境問題、世界の人口問題など、現在の人類が直面している課題の萌芽は上記の年表中に見て取ることが出来る。さらに、過密・過疎問題、高齢化の進行、特例（赤字）国債の発行による財政悪化など、現在の日本が苦悩する課題もこの時期に起因するものが多いと改めて実感する。

時代の風潮のなかで、僕らはフォークソングを口ずさみ、髪を少しずつ伸ばしていった。入学時には既に長髪が許可されていた浜高で、制帽の自由化が決定したのは高校3年時だった。2年越しの生徒の要望が実現したもので、私も当時は少し長い髪には似合わない制帽の自由化を望んでいたが、今となれば白線3本と校章の付いた制帽をととても懐かしく思い出す。通学途中の中芝橋で強風にあおられた制帽が橋下の浜田川まで飛んでいき、必死で川面から掬い上げたのも、ほほえましい青春の思い出となっている。

浜高の授業で少しずつ社会や世界の有り様を学び、そして浜高で出会った友人たちと社会や人生について語り合うなかで、僕らは徐々に政治的・社会的関心を深めていった。「早く選挙に行きたいな、若しかすると政治を変えられるかも」と真剣に考えていた僕らも、実際には20歳にならないければ選挙権は認められず、高校時代に選挙できるとは夢にも思わなかった。ジョン・レノンが「戦争は終わった(War is over)」と歌った年から40数年たった今でも、戦争・紛争は実際には終わりを見せず、世界各地で戦闘やテロが続いている。ジョンが「想像してごらん (Imagine)」と歌った世界の有り様は未だ現実のものにはなっていないけれど、その実現を切に願い、その実現に向けて頑張ろうと誓った僕らの思いは、これからもずっと大切にしたい。

浜高生のみんなに望むことは、「高い理想」を掲げ、その実現に向けて「誠実な努力」を重ねること、そして地域・国家・世界の抱える様々な課題の解決を目指して、浜高での生活のなかでその基盤となる資質・能力を身に付けてほしいということである。みんなの日頃の頑張りをみていると、きっと出来ると私は確信している。同時に、みんなが様々な舞台上で活躍している姿を想像すると、私はとても楽しくなる。浜高生頑張れ、みんな頑張れ。

(浜高生徒会誌巻頭言 平成27年12月記)